

昭和十五年『共生』誌における椎尾辨匡師の言説について

加藤 良光

本稿は、昭和十五年に財団法人「共生會」によって刊行された月刊『共生』誌の各号に掲載された椎尾辨匡師の執筆文、講演録の中から椎尾師の言説について、検討するものである。

昭和十五年の月刊『共生』誌の一月号から十二月号までの記事の見出しを列記すれば次の如くである。

一月號・椎尾辨匡「紀元二千六百年」（記念すべき年を迎ふ）（年頭の所感）（二千六百年前と今日）（大難來るとも）（艱

苦打開の實踐要目）

・附録 みことのつどひ講録……別冊

二月號・椎尾辨匡「當面日本」

・椎尾辨匡「農耕建時代」

三月號・詔書

・椎尾辨匡「皇紀二千六百年の詔書を拜して」

・椎尾辨匡「獨立開放と提携親善

―新時代指導精神提携共生の道―」

四月號・般若心經本文

・椎尾辨匡「般若心經講話(一)」

・椎尾辨匡「第七十五回帝國議會義務教育に關する質問演說速記」

五月號・椎尾辨匡「共生と共生會との方向」

・大阪市敷津尋常小學校「皇民鍊成の綴り方教育」

・楠章「皇軍讀」

・椎尾辨匡「第七十五回帝國議會義務教育に關する質問演說速記(二)」

・「編輯雜記」

六月號・椎尾辨匡「蒙久養正」

・椎尾辨匡「般若心經講話(二)」

・編集部「共生とは何か」

・森部逞禪「賀椎尾辨章上人晉清林寺」

・椎尾辨匡「全國共生結衆豫告」

七月號・(日支事變三周年記念)

・椎尾辨匡「世界の變局に際し同人に懇ふ」

・宮澤説成「法然上人の信仰」

・「全國結衆趣旨書」

・「財團法人共生會決算報告」

・「編輯後記その他」

八月號・椎尾辨匡「敵前上陸回想録 不滅の英靈に捧ぐ」

・椎尾辨匡「般若心經講話(三)」

・椎尾辨匡謹述「明治天皇の 農學に對する御勅語を拜して」

・「評議員會議事録」

・「亞細亞共榮圈の建設に」

・「評議員會議事進行狀況報告其ノ他」

九月號・椎尾辨匡「昭和維新を導くもの(一)」

・椎尾辨匡「般若心經講話(四)」

・高山學道(帝都日日より)「椎尾辨匡論」

・編輯部「所感」

・「昭和維新翼賛共生部隊動く」

十月號・椎尾辨匡「昭和維新を導くもの(二)(三)」

・椎尾辨匡「般若心經講話(五)(六)」

・「昭和維新運動のその後」

・「維持會員申込芳名：後記」

・附録：椎尾辨匡「新體制の指導理念」

十二月號・椎尾辨匡「全一日本(2)」

・ 椎尾辨匡「支那の旅より(2)」

・ 藤井實應「向阿上人御法語」

・ 編輯部「椎尾師の渡支」

このように月刊『共生』には椎尾師の記事が多く記載されている。

その内容も多方面に亘っているが、本稿においては、次の三項目を挙げて検討することとする。

- 一、共生としての東アジア観
- 二、共生会活動のこと
- 三、共生としての世界観

以下順に椎尾師の言説を見ていくこととする。

一、共生としての東アジア観

椎尾師は月刊『共生』誌昭和十五年三月号「獨立開放と提携親善―新時代指導精神提携共生の道―」において次のように述べられている。

「獨立は個在の要求、集散共に外部的増減に過ぎない。分子原素でも個人國家でも、眞の發達生活は成り立たない。提携親善は共生の主張、廣狹等しく内部的に在り、動植物でも、世界國際でも、茲に眞の生命が發達する。一般人は現に問題となれる幾多事實に於て、此の二大原理の對立をハッキリとさせて居らない。排英興亞といふも單に英國人が悪いといふのでない、英國人が其獨立個在主義から、先取獨占、侵略併合、搾取領有を民權の發展、英國の正義の如く考へる。其壓迫苦痛缺乏に泣くものは開放を叫ぶ。獨立、開放互に轉々して、同じ原理の異相に過ぎない。此の獨立

個在の主張を現代から退却せしむる事が排英の思想的根本である。英ソ等の諸國が、みだりにアジアに進出して、或いは國土に或いは利權に領有搾取を恣にして居る事から、開放脱却せんとする事が現在のアジアの一つの動きではある、が興亞の眞の相ではない。

興亞の眞の相は、日本に發達した共生の大道提携親善の道が、アジアに擴大されゆく事である。日本が肇國以來幾千年、八紘一宇同胞一家の理想に邁進し來つたもの、其を國內に完成する事に、必ずしも容易ではなかつた。皇室の稜威、曆聖の教導、遂に舉國一致の國體的盛觀は明治維新以後に着々として發達し來つた。而かも維新以後、歐米の文物に直隨するに急なるあまり國體無比を主張しつつも、日本思想が、獨立個在の歐米主義と對立し、更に優越する所以を明確にしなかつた。にもか、はらず、國運は年々に發達し、使命は事件を重ねて醸成し來たつて日韓併合となつた。蓋し獨立開放は隣次相搏つが故に遠交近攻の謀略となる。提携親善は同胞隣國に初まり近きより遠き 及ぼし徳交となる。乃ち明治の末葉日韓併合となり、鷄林十三茲一千三百萬民が、先づ提携親善を行ふ事となる。當時の我國民は、歐米國際思想にのみ慣らされたるが故に獨立か征服かのみ考へ、日本の使命を理解するものが尠なかつた。獨りこれを最も明白に認識し指導遊ばしたのが 明治天皇陛下であらせらるゝ、「李王家并に朝鮮民族に迷惑にならぬ様、將來心して遣はせ」との大御言を拜して、桂總理は 聖慮の深さに恐懼し、爾來歷代内閣總督皆一視同仁の聖勅を實現する事に努力し來つた。我が國民すら、なほ眞の使命 聖言を審にしない。まして半島の民衆が、日本に征服併合されたりと考へた事は無理もない事である。思想は獨立か征服かに増され、形式は併合してたゞ日本と稱する場合、被征服の妄念によつて獨立運動に狂奔するものも出た譯である。然るに春秋茲に三十年、民衆は倍加し、教育は普及し、産業發達し、全鮮の發達、王道の興隆、空前なるを見る。日本は國家總力を擧げて枯死せる半島を更生せしめたのである。(中略)

十九世紀は西洋の獨立個在、唯物科學萬能の時であり、英佛は其樞軸であつた。二十世紀は世界渾一の時、殊に太平

洋沿岸を踏臺とすべく、アジアは復活しなければならぬ。其頭目たる日本は、地理的にも重要性をもつもの、先づ、内鮮を樞軸とし、昭和六年になつて日滿を樞軸とすべき新展開を見、更に十年東京南京を樞軸とすべき事となつた。其指導精神は共生であり、提携親善であり、獨立個在征服侵略ではない。王道の發達によつて近きより遠きに及び、先づ東亞の新秩序を全ふし、進んでアジアの全面的復活となり、宇内を擧げて八紘一字を成願すべきものである。(中略)

今や支那は、新中央政權樹立に忙しい、それには萬世無窮の大道でなければならぬ。獨立個在を本としては、これを實現する事は出来ない。民權を強調した三民主義が、今や民族、政治、經濟の獨立開放を求むるものと歸正されたといふが、英佛ソから其民族政治經濟の獨立開放を求むる點に於ては、現實を説明する事が出来るが、獨立開放の物的個在思想は、又直に日滿支をも中南北をも分裂崩解せしめ、日本が、二百億の財と、十餘萬の英靈とを犠牲にしたる聖戦も、不滅の支那を見る事能はずば、其戦果を空しくする事になる。支那も五千年來の擾亂を脱して、彌榮無窮の國家たる光輝を失ひ、少康再亂浮目を見る事になる。それは、誤れる獨立開放思想を蟬脱し、宇宙の共生大道に、融合する日提携親善二不二の大生命を根本思想とする事に目覺めなければならぬ。」

と述べられて、共生としての東アジア觀を表明されている。欧米の思想を獨立個在として規定し、東アジアを提携親善の思想に基づいて共生すべきであると説かれている。

二、共生会活動のこと

椎尾師は月刊『共生』誌昭和十五年五月号「共生と共生會との方向」において、共生について次の項目を設けて説明している。その項目を列記すれば、

(一) 共生の立場

(2) 共生の出発點

(3) 共生のコース

(4) 共生宗は是か

(5) 教化體としての共生會

以下項目ごとに見ていくこととする。

(1) 共生の立場

「共生會を盛んにしようといふことは間違ひではないが、私としてはもつと大きい立場から共生を考へてゐる。それは大正七、八年頃の思想混亂をみて、大正十一年に共生といふ思想原理を發表し、結果に、講演に印刷物にその普及を計つたわけであるが、これ等による共生なるもの、理解以上にひろい意味の共生の擴りは大きい。恐らく共生なる目印しがなかつたならば、今現に活動してゐる部面の佛教はなかつたであらう。これが共生會自體の擴張とか團體的基礎を固める運動でありましたなら、共生會は勿論有力なる團體となつてゐるでせうが、反面には生きた共生の事實は今ほどは擴つてはゐないだらう。」

と述べられて、大正十一年の共生思想發表以來、共生という目印と共生會という団体の立場の違いを表明されている。

(2) 共生の出発點

「確かに今日は教化宣傳に一期を劃すべき秋であります。精神教化が緊要であります。支那問題にしてみても共生精神を明瞭にしなければなりません。又、四月一日から施行される宗教團體法に徴しても、宗教的見地からは新教團をつくるべきか、教化團體として立つて行くかを、好むと好まざるとに拘らず決定せねばなりません。共生會を道義的な動きとするか、宗教的な動きとするかを今日ハッキリさせたいと思ひます。私共はこの過渡期の橋渡しをする役目を帯び

てゐて、次の代の人は又次の代のつとめをやつて行くものと考へます。これ等を根本の腹の据えどころとして考へあつてみたいと思ひます。」

と述べられて、昭和十四年四月に公布され、昭和十五年四月から施行された宗教団体法に対し、共生会が新教団となるか、教化団体として進むかを問題提起されています。

(3) 共生のコース

「従來の考へでは、「共生のつとめ」を誦し、講話をき、作業をし、食作法をするのが共生だといふ考へがあります。云ふまでもなくそれは曾つての共生の一つのあらはれにすぎぬ。共生は音楽・舞踊・繪畫・彫刻に、工場に商店に田圃に、ありとあらゆる方面にあらはれるものであつて「共生のつとめ」をすることは其等の中の一つであるにすぎません。共生は共生なる特殊の様相ではなく、あらゆるところに出るべきものである。斯く考へて來ると新しい部面に目を向けることが出來ます。今日までも同じく一定の様相の共生を説いてゐたわけではないが、共生なるもの、といふ一つの出來あがつた觀念がありました、これは破らねばならぬ。

例へば「共生のつとめ」を社會の各層に適するやうに、各種類のをつくつたならどうかといふ案もよいと思ふ。尤も「共生のつとめ」改訂の意見はこれまでも屢々出ではゐました、然しこれをつくれれば共生の根本の考へ方に混雜を生ずる虞れがありましたので今迄は一つでとほして來たが、これからは分けて行くのも一案ではないかと思ふ。

過去の共生運動にも數へきれぬほどの働き榮はあつたかと思ひます。勿論創業當時にとつた運動形式は、ある點では修養團の運動に影響されたところもあつたかと思はれるが、それだけでなく共生運動が今日の社會運動に與へた力は相當大きい。今日行はれてゐる道場形式の基礎は共生に大きな力がある。共生運動のとつた第一期の示唆、例會、食事運動に、今日生々として日本の改めになつてゐます。今日はそれ等を更に深めて行くべき秋だと考へます。二十年前から

の形ちは今日を以て一段落したと云へる。これから分化し進化することが必要であります。」

と述べられて、共生会創業当時の運動形式が一段落し、これから分化・進化すべきであると説かれている。

(4) 共生宗は是か

「これからお話ししようとするのは、昨夜の宗派の教化問題に關係がありますが、共生とは教化運動の爲に名づけたものではない。然し乍ら共生會といふ建前は分化の一つとして成立するし、その趣旨を討論、研究し、これに従事する人を育成することもよろしいと思ひますが、共生會をやるのが共生の全部ではない。従つて共生は宗教でもなければ宗派でもない。宗教でないと言ふ意味は佛教とかキリスト教式の宗教ではないと言ふのでありまして、宇宙一切に生きぬいて行くと云ふ宗教から云へば共生がそれである。この宗教を一本の木と譬へるならば佛教とかキリスト教はその横枝の一つ一つであります。即ち宗教に於いてすらさうでありますから、ましてや宗派に共生が偏するやうなことはありません。(中略)

共生は對立を嫌ふものであつて、斯様な競争體になるのは本意ではない。釋尊は一乘成佛を説かれた、對立を去つてみんながほとけになれると説かれた、即ち排他ではあつてはならぬといふ佛教であるのに、あゝ云ふことを説くのが佛教である、と他から見られるやうに、共生とはともいきするのだ、と云ふのが共生宗なり、とせられるのと同じであります。斯様に考へて參りますと、共生會は一宗一派的な共生宗をたてるのは本意でなく、教化體として進むのが道であらうと考へます。」

と述べられて、共生會は、宗教団体法による宗派を立てることなく、教化団体として進むべきであると説かれている。
(5) 教化體としての共生會

「然らば教化體としての共生會は如何なる道を進むべきでありますか。即ち今の時勢に即應し各別相に處して行く、

少年、青年、婦人、職業等の各別に進めていく。(中略)

共生を宣傳するのに改めて道具だとして宣傳する必要はありません。共生が各生活層に這入つて行くそれ自體が共生の模範宣傳であります。現代はそれを要求してゐます。今がそれをやる時期です。二十年前にはそんなことをやつても宣傳にはなりませんでしたが、今はそれが出來ます。これ等が成就される處に共生の發達があり、分化されたものが綜合されることにもなります。

そこで共生會の本部は何をするところかと云へば、各部門の連絡指導の衝にあるのが任でありまして、今迄はそれが缺けてゐました。二十年昔はその連絡をしたくても實行機關がなかつた。今は各種の職場が出來てゐる。(中略)

宗教と産業とを結びつけたのは、これまでのともいきのおおきな仕事でありましたが、これを更に強化するのも大切であらうと考へます。

斯くすることに依りまして共生ものび、共生會も教化體として進む方向がきまるのだと信じます。」

と述べられて、共生會が各別相に対処して行き、分化されたものを本部が総合することにより、教化団体としての方向が決まると説かれている。

三、共生としての世界観

椎尾師は月刊『共生』誌昭和十五年七月号「世界の變局に際して 同人に懇ふ」において、共生としての世界観を次のように述べている。

「過去十九年を遡り、共生が生まれた年は何時であつたかと云ひますと、それは大正十一年でありまして、丁度ドイツがベルサイユ條約を履行させられて百廿億の償金を返済しなければならぬので愛國勤勞十四時間を實行してゐると

きであり、日本は、當時の世界大戦の餘波から好景氣に酔ふて階級闘争のもとに勞務時間短縮、賃銀増加を叫んで、八時間労働をも嫌ふて居つたときであります。(中略)

ドイツはこの十四時間制を今日までも續け通しまして良成績を収めて來たものでありまして、當時、勝利に酔ふて居りました英・佛をみまして、私は彼等の没落の第一歩であることを述べておきましたが、それはやがて、十九世紀の大西洋時代から廿世紀の太平洋へと移り、その形が現れて來たとみるのであります。又當時は、まだ自由主義、個人主義が幼稚でありまして大方は氣付きませんでした。私はやがて太平洋時代の指導精神となるものは、東洋精神即ち共生思想が前者に代るものであると云つたのであります。又、當時に於きましたは、ドイツは慘めではあるが、彼こそやがて復興すべきであり、一九五〇年迄にはそれが明瞭に現れるといふことを私は主張しておきましたが、今日はそれが適中して居りまして、我々が指導精神に於て、誤らなかつたものであることを示すのであります。(中略)

日本は大陸に結び付きを要する、印度、支那、獨逸、佛蘭西、伊太利、ロシヤと組むべきであると言ふことを、私は以前に云ふたのでありまして、國家共產主義といふだけならばシベリヤをもよしとするもので、それがインターナショナルである時には共產は獨占利益の爲の國際運動となるから禁壓すべきであるといふことを附け加へました上で、元來ロシヤは日本の憎むべき性質のものとのみ出來ない、日本は日本の國體を發輝高揚すると共にロシヤのそれも認むべきであることを述べましたが、これが第三インターナショナルの運動を起しましたので、共生はそれに對する嚴肅な批判をなして來たのであります。

これは、無産者の多い國として共生がこれを批判し得たと見るべきで有りますが、その後、共產主義の轉向者が最も強い反ソ聯の態度に出たといふことは彼等轉向者の頭腦が初めから嚴密でなかつた事を明らかにするものであります。本來なれば彼等はむしろユダヤ主義の排斥に進むべきであつたと考へるのであります。

英、米、佛のユダヤ主義こそ排斥さるべきでありまして、全力非國家、クリスト教の假面が剥がれないならば人類を光明に導くことは出来ない、ユダヤ主義が破られて世界經濟力の全てが整理されるのであると私は信ずるのであります。ユダヤ人は米國に巢喰ふて遂にその末路をたどる。現在ドイツにしましてもその敵としますのは英佛ではなくユダヤであり彼等がヨーロッパから立去るならば歐洲問題も簡單に立直るのであると私は思ふのであります。(中略)

ドイツの充實した強さと攻撃速度とに對して佛とベルギーはこの八月迄抵抗出來、英はドイツに一撃を加へられるに止ると思はれておりましたが、實は情勢が一變し、この九月に行はれることになつておりましたヒットラーの渡英も見ぬことになつたのであります。

歐洲の戦火は速進されまして、その結果、英佛の分離といふことにドイツが成功しましたので獨佛の提携がなされ残るのはいまや英國だけといふことになつたのであります。こゝで大いに注意すべきことはヒットラーの態度であつて、彼の心にいま起きてゐることは隣邦協力の道と、獨佛源平の争となることをさげんとする考へとでありまして、この兩事が彼を拔群とする所以であると同時に彼が歐洲の指導者となる所以であります。

日本の七百年の源平戦争が法然上人によつて教へられ明治維新になつて初めて共生的になり日本發展の根據をなしたことを想ひますならば、いまヒットラーの心意の裡にも、目醒めたるものを見るのであります。

現在、ドイツ英國攻撃の手續としましては、先づドーヴァーを渡ることではありますが、それが爲にはドイツは海峡の兩側を潜水艦で守り英艦の浸入を防ぎつつ電機雷飛行機の援助とともに三方から英國を攻める考へであると思ふのであります。この場合ドイツは英國をアメリカに追ひ出す爲にアイルランドの地方は、逃げ道として力を入れずに軍を進めるものと考へられるのであります。之に對して英國はどうであるかと云ひますると彼は海戦だけを頼みにして居り陸兵は新募兵でありますので獨伊協力の前には手も出ないといふ有様で、この新情勢の結末がどうなるかを考へますなら

ば、それには三つの方法が考へられるのであります。

第一には、休戦講和であります。これには餘程優れた政治家が必要でありましてロイドジョージ程の身を殺して國を救ひ得る政治家は現在ないのであります。第二に考へられますのは、この九月頃には英國は亡びるといふことでありまして、八月末か九月の始め邊りには英の金持は皆逃げ出し、陸兵と勞働者がドイツと提携して居残るであらうし海軍はアメリカに逃げ込むであります。

そうなるのとアメリカの參戰が早くなり遅くも來月中にはその運びとなるであります。第三は、ドイツが何かの理由で今年は威嚇攻撃だけに止り來年の四、五月頃に戰火を交へるといふ見方がありますが、これは大體佛の落ちる前の見方としては有力でありましたが今では前述の第二の見方が決定的であります。即ち、英國は全軍を引きつれアメリカに寄生するであります。そうなれば英米佛を結ぶところのユダヤ勢力が増大して米國の參戰となるのであります。その結果ジューとジューならざるものとの争ひが生じ、英國は個人的自由主義の勝利を自惚れ、米國は文明擁護の正義觀から立ち上がるのであります。英米佛の利權は元來世界の八割を占め、今度もそれを守る爲に戰はねばならぬのであります。彼等は一端は破れても戦ひが長引くときはドイツ伊太利等に對して經濟外交の勝利ありと確信してゐる様であります。それは大いなる誤算であつて、百年戰爭など、云ふ事は世界の時局の上からは考へられぬことであります。

(中略)

このたびの歐洲問題が起きたといふ事は、その爲に援蔣ルートが斷たれたといふ事を勃起したのであります。この機に日本は歐洲と調子を合せドイツの英攻を援けねばならぬのであります。若しも歐洲とアメリカとが戦ふ事になりますと海戦でありまして、アメリカは建艦を急造して日本に當るとの豫想のもとに二次海戦の準備を進めておりますから、日本はドイツと一體となつて海戦を引き受けねばならぬといふ時期に打つかるのであつてかつそれはこの九月以向

の状態と思はれます。ヒットラーは一步を進めて獨佛の一括を圖り英國の資本主義を倒すことを目指すものでありまして、彼が聖戰に共鳴し奪はれたものを取り返すだけに止まり掠奪を思ひ止まり軍を進めるならば彼こそ英雄であるが、このところが彼を英雄非英雄とする分岐點だと思はれるのであつて、幸ひ彼が共生的に指導を深めたならば日本は彼と組むべきであります。そしてクレドイツと金と兵器だけを對英政策に於て求むべきであります。

ヒットラーは日本思想を眞似て居る様に云はれるのでありますが、實は一步進んで居ると私は見るのでありまして日本が共生的に充分でなく、今後凡ゆる方面に涉つて共生精神を生かして行く舞臺が展けて居りまするとき、我々は世界と共生でなければならぬと教へることに努力せねばならぬのであります。それには極く小さなことにも歡喜を感じる事で、喜びの共生發展といふことが最も大切と思ふのでありまして、業務發展の共生にも勝る喜びの増進が共生に附け加へられるべきであります。」

(と述べられて、昭和十五年(西曆一九四〇年)六月、ドイツ軍のフランス侵攻の結果、独仏休戰協定が締結され、ヨーロッパの情勢が變化したことによる、椎尾師の見解が説かれている。その中で、今後の世界に対する予測をされ、イギリスとアメリカが連携し、日本とドイツが場合によれば組むべきであると主張している。またその中ではユダヤに対する視点が注目される。

以上、昭和十五年『共生』誌における椎尾辨匠師の言説について見てきた。

特に三月号の「獨立開放と提携親善―新時代指導精神提携共生の道―」において、共生としての東アジア觀を、

五月号の「共生と共生會との方向」において、共生會活動のことを、

七月号の「世界の變局に際して 同人に懇ふ」において、共生としての世界觀を、見てきた。

今後の課題としては、昭和十五年の前後、椎尾師の言説の推移變化を見て行くこととする。

キーワード 椎尾弁匡 共生運動 共生会
(かとう りようこう 共生文化研究所 研究員 浄土宗 普仙寺 住職)